大学生の日常生活における書籍との接触

鎌田 均

(京都ノートルダム女子大学；准教授)

College students' encounter with books in their everyday life

By Hitoshi KAMADA

(Kyoto Notre Dame University)

はじめに

若者の読書離れが進んでいるとよくいわれる。しかし、清水（2014）は、以前からあった若者の読書離れという意識は、作り出されてきたものだ論じている。最近では、大学生のほぼ半数が1日の間に本を読まないという調査がある（斎藤 2016）。平山（2015）は、大学生対象の読書や他のメディアの利用についての調査から、大学生の読書量が低下していることを報告している。一方、毎日新聞社（2016）の読書世論調査では、20歳代では約5割が日常的に本を読んでいると答え、全年齢層と同様の数字であった。調査の内容、また読書をどう捉えるかの違いもあり、実際に若者が読書を顕著にしなくなっているのかは一概にはいえない。いずれにせよ、近年のインターネットのさらなる普及により、人と様々な情報メディアとの関わりにも変化が生じており、それが読書にもなんらかの影響を与えていると考えられる。本研究は大学生が様々な情報と接触している日常生活において、いつどのように本に触れているのかを調査した。

文献レビュー

Ross（1999）は、娯楽目的の読書を、特定の情報を求めない種類の情報行動として捉え、人々が読書によって得たことを日常生活における局面で役立てていることを明らかにした。Abbas and Agosto（2013）は、娯楽目的の読書が若者の日常生活における情報行動としての研究対象とされつつあるとしている。Howard（2011）は10代前半の娯楽での読書について調査し、こういった読書が、娯楽としてだけでなく、彼らの日常生活そして大人への移行において役立っているとしている。また、Parlette and Howard（2010）が大学生の読書について調査し、彼らの娯楽目的の読書が学習にも役立っていることを報告している。

調査方法

今回の調査は、対象者が日常生活でどのように情報に触れ、その中で本とどのくらい、どのように関わっているかについての事例を得ることが主目的であり、Sandelowski（2000）にあるような、質的記述のための研究アプローチを参考にしつつ調査を行った。大学生8名（女

性)を対象に約1時間の非構造化インタビューを個別に行なった。対象者は筆者が所属する大学で募集し、学内の研究倫理審査の承認を経て行われた。インタビューでは、勉学以外の日常生活で触れた情報について、最近の個別の事例を回想する形で、どのような情報で、どのような時にそれに触れたかについて質問した。そして、本を読んだこと、または接触した情報と本との関係について質問を加え、適宜回答に応じて補足質問を行なった。インタビューの録音を逐語録にし、内容から導き出されたテーマに対しコードを付与して分析した。

結果

普段どのくらい本を読んでいるかについての回答は様々であった。4名の学生(回答者2、3、6、7)が本をあまり読んでいないと答えた。1名(1)は月に2、3冊くらい読むと答え、3名(4、5、8)は本をこれ以上の頻度で読んでいると答えた。本をどのくらい読んでいるかに関わらず、回答者の全てがほぼ毎日インターネット、とりわけツイッターを多く使っていた。回答者全てが、インターネットを使っている時間はそれほど長くはないと考えており、通学中や他の活動の合間に使っていると答えた。しかし、回答者(7)のように、インターネットに没頭しているつもりはないが、「多分携帯触ったり、とか無駄な時間を止めたら、もっと時間あると」いうように、無意識に時間を使ってしまうという意識を持っている場合もあった。

日常生活で必要な情報の多くはインターネットから入手し、書籍については、娯楽目的以外ではあまり利用しないことが多かった。しかし、試験の問題集といった書籍でしか入手しにくいものを入手することがあった。就職活動に関する本など、日常頻繁に参照したいものも書籍として入手するケースがあった。旅行ガイドについても、旅行に携帯する目的で紙媒体のものを選ぶことがあった。

大学に入ってから本を読むことが少なくなった学生もあった。一人(2)は、大学に入るまでは近所の公共図書館によく行って本を借りていたが、最近は忙しくなったのであまり行かなくなったと述べた。この学生は、「年に一回あるかないか」と、現在はほとんど本を読んでいないと答えていたが、実際には最近でも小説を読もうとして本を借りていた。しかし、本を手に入れても結局読まないか、最初の一部分しか読まなかったりしていた。理由として、本を読む時間がなかったこと、また本を読もうとしても本の内容に入り込めなかったことが挙げられ、以下のように述べた。

集中力が、なかなか。一回はまったら、もうバツて読めるんですけど、それ(図書館で借りた本)なんか、一回はまるどころまで行かずに返却、ってなっちゃって、

他の学生の場合、本を読むときは、少しずつ読むのではなく一気に読んでしまうか、読めるところまで読んでしまう、という傾向があった。しかし、本をあまり読まない学生は、忙しい、時間がないことを理由に挙げている。本をよく読む学生の一人(8)は、本を読もうと思うときは、時間をつくって一気に読んでしまう、と答えた。

日常の友人との会話などで本を友達から勧められるという回答もあり、話題に挙げた本を友人から借りて入手して読んでいる場合があった。本を読むときは自宅で読むことが多く、本を最も多く読んでいる学生も含めて、外出時の電車内などで本を読む学生は今回の調査ではいなかった。自宅で読む際には、たまたま時間ができたときや、ネットやゲームなど他のことに飽きたときに読むという回答があった。

本を普段読んでいる学生は書店に自分から赴くことが多いが、本をあまり読んでいない学生も、書店を通りがかりに見かけたりする時には書店によく入ると答えた。例えば以下のような答えがあった。

最近だと、もう、学校終わってすぐバイトだったりするんで、行く暇がなくて、でも、バイト無い時は、結構頻繁に、えっと（場所の名称）とか駅降りたらすぐあるんで、（中略）服見に行ったりするんですけど、あの、服見るような感覚で本屋入って、ぐるっとして出たりっていう、(3)

本を頻繁に読む学生は書店でよく本を購入しているが、他の回答者は、店頭での宣伝に惹かれて小説を買ったケースなどはあるものの、本屋に立ち寄った際に本を購入することはあまりないと回答した。一人(6)は、本に使うお金があれば買いたいと思う本があった、と答えたが、他の回答者の多くは、本屋に立ち寄った際には店内を見て回るだけで、特に書籍を買いたいと思うことはあまりないと答えた。一人の学生(3)はこう答えている。

ちょっと読んで面白いなっていうのが欲しいだけなんで、あんまり買ったりはしないで、あ、こんな面白いんや、って戻してます。

考察

学生は日常で必要な情報、娯楽や趣味のコンテンツをインターネットから得ており、Abbas and Agosto (2013) の研究で示されるような、近年の若者が常にオンラインで情報をチェックし、また獲得しているという日常の行動に合致している。Mokhtari, Reichard, and Gardner (2009) は、大学生がインターネット、テレビ、読書に使う時間について調査し、彼らがインターネットを多く利用している一方で、それが直接彼らの読書習慣に影響しているともいえないとしている。今回の調査でも、回答した学生はインターネットの利用が他の活動に充てる時間に大きく影響しているとは明確に意識していない。

普段本をどのくらい読んでいるかに関わらず、学生が書店を通りがかるような際にはそこを訪れていることにもあるように、本には一定の関心を持っていることがわかる。しかし、書店を訪れることが必ずしも書籍を購入することにはつながっていない。金銭面を意識して結局買わなかったという回答もあったが、書店内を見て回るだけで十分で、買うことはあまり考えていないというケースも少なからずあった。また、友人との間で本が話題に挙げた場合にそれ

を読むこともある。話題に上がったので関心を持つことも要因であろうが、友人から入手できていることもその本を読むことに繋がっているかもしれない。

Baron (2015) は、オンライン上で短いテキストに頻繁に接触する環境が、読書という長いテキストを吸収する集中力が必要なことに及ぼす影響について言及している。今回の調査でも、本を読む時があってもなかなか内容に入り込めないケースがあったが、この学生は大学入学以前には本をよく読んでおり、インターネットに多く触れていることが直接の要因であるかは明らかでない。他のケースでは、一度本を読み出した際には、全部を一気に読んでしまうことが多く、集中力が続かないということでは必ずしもない。しかし、読書にはある程度まとまった時間が必要となり、その時間が作り出せないことは要因かもしれず、本をよく読む学生はその時間を積極的に見つけている傾向がある。

結論

若者は日常生活において常にオンラインで情報に触れているが、今回の調査からは、インターネットに時間を使っているから本を読まなくなった、という直接の関連を意識していることは見られなかった。学生が本には関心を持っている一方で、一部の学生にとっては、それが本を読むまでには至らない。インターネットで日常必要な情報、娯楽目的のコンテンツがその場で簡単に手に入る中で、本のことを知り、それを入手するという過程の存在、まとまった時間を確保すること、そして入手して読もうとまでは思わないという意識が学生と本との距離を作り出しているとも考えられる。

参考文献

- Abbas, J. & Agosto, D. E. (2013). Everyday life information behavior of young people. In J. Beheshti & A. Large (Eds.), *The information behavior of a new generation* (pp.65-91). Lanham, MD: Scarecrow Press.
- Baron, N. S. (2015). *Words on screen: The fate of reading in a digital world*. New York: Oxford University Press.
- Howard, V. (2011). The importance of pleasure reading in the lives of young teens: Self-identification, self-construction, and self-awareness. *Journal of Librarianship and Information Science*, 43(1), 46-55.
- Mokhtari, K., Reichard, C. A., & Gardner, A. (2009). The impact of Internet and television use on the reading habits and practices of college students. *Journal of Adolescent & Adult Literacy*, 52(7), 609-619.
- Parlette, M. & Howard, V. (2010). Personal growth, habits and understanding: Pleasure reading among first-year university students. *Evidence Based Library & Information Practice*, 5(4), 53-69.
- Ross, C. S. (1999). Finding without seeking: The information encounter in the context of reading for pleasure. *Information Processing and Management*, 35, 783-799.
- Sandelowski, M. (2000). Whatever happened to qualitative description? *Research in Nursing & Health*, 23(4), 334-340.
- 斎藤剛史 (2016). 4割以上が1日の読書時間「ゼロ」: 15年「学生生活実態調査」全国大学生協連. 内外教育, 6490, 10.
- 清水和彦 (2014). 「若者の読書離れ」という“常識”の構成と受容. 出版研究, 45, 117-138.
- 平山祐一郎 (2015). 大学生の読書の変化: 2006年調査と2012年調査の比較より. 読書科学, 56(2), 55-64.
- 毎日新聞社 (2016). 2016年版読書世論調査. 東京: 毎日新聞社.